

東南アジアにおける民族服の研究 (第5報)

北部タイ山地民族 リス族の衣裳

柴村恵子・村瀬史子・榊原弥生

Studies on Folk Costumes of Northeast Asia (V)

The Costumes of the Risu Hill Tribes of Northern Thailand

Keiko SHIBAMURA, Fumiko MURASE and Yayoi SAKAKIBARA

緒 言

近年情報化社会を背景に生活文化の国際化が進みつつあるが、このことは衣生活においても例外ではなく、衣服の形態も世界共通なものへと変化する傾向にある。その中において東南アジア大陸部の一隅、北部タイの山岳地帯に住む少数民族は遠くからでも、一目で種族の区別ができる程、特色のある固有の衣裳を着用している。これは各種族が長い歳月の間に文化遺産として大切に培ってきたものであり、種族堅持の上からも重要な役割を果たしてきた。この衣裳は年間を通して一種類であり、日常着としては勿論、夜寝る時もそれを着ている。また、それぞれの衣裳の模様や施されているものの一つ一つが、精霊や信仰、祖先からの伝承に結びついており、心を引きつけるものが多い。我々はかねてからこれらの衣裳に興味を持ち、比較的報文や資料の少ない形態面及びデザイン面を中心に研究を行ってきた。

幸い、1980年から1985年にかけて3回にわたり現地調査を行う機会を得たので、その結果の一部を名古屋女子大学紀要第27号、28号、32号に報告したが、今回は北部タイ、チェンライ郊外のパンサー、バンマイデンの2部落においてリス族の実態を調査したので、彼らの生活と衣裳について報告する。

調査方法及び資料

調査

1. 1980年12月24日、チェンマイ大学山岳民族研究所を訪問し、同研究所所蔵の生活用具、衣裳の見学と山地民族の概要を把握した。
2. 1982年12月下旬と1984年12月下旬から1985年1月上旬にかけてタイ人及びアカ族出身で、リス語も話すアトウー氏を案内人として北部タイのチェンライ郊外のパンサーとバンマイデンの2部落を訪問し、リス族について聞き取り、観察、写真撮影等の方法により調査を行った。

資料

1. 現地で入手した衣裳及び写真
2. 人間博物館リトルワールド所蔵の衣裳・付属品
3. 末尾に掲げた文献

以上の実態調査及び資料に基づいて、リス族の生活と衣裳について考察を行った。

結果及び考察

リス族について、タイ人は一名リーサウと呼び、中国では僛僛族リスと言われている。彼らの人種的起源については明確ではないが、数世紀以前には、中国チベット及び四川省附近に住んでおり、およそ200年くらい前に二つの方向に別れ大移動し、一方は中国西部に移り住み、他の一方は雲南省の怒江（サルウィン川の上流）、金沙江（揚子江の上流）沿岸に移り住んだと伝えられている。タイに住むリス族は前者で、更にその後、ビルマのシャン地方を通り南下して約70年前からビルマとラオスの各々の国境に接する北部タイの山岳地帯に住みつたと伝えられている（図1）。このグループは南グループと呼ばれ、今もチベットに残っている北グループと区別されている⁵⁾。彼らは十数年前まではよく知られていなかったが、近年ようやく知られるようになった種族である。言語分類では、この種族はアカ族、ラフ族同様チベット、ビルマ語系に属しロロ族（現在中国では彝族と呼んでいる）を祖先としており、両者の間には言語や習慣に関連性がある⁶⁾と言われている。

リス族は、もとは山地で狩猟を主とし、弓の名手として名高い民族であったが、南下するにつれて平地に住むタイ系農民の影響を受け、農業を営む者が多くなった。したがってタイに住むリス族は現在では焼畑農業が主な生業となっている。リス族は中国にはおよそ48万人、タイには約1万2千5百人が住んでおり、チェンライ、チェンマイ、マエホーンソーンの山地にその多くが住んでいる。その他タークやピッサヌ・ローク附近にも散在している。

1. 生活と習俗

(1) 住居

北部タイ山地民族の中でアカ族は、他の種族に比較して、一段高い場所に家を建てて村を造るが、リス族もそれに近い高地に村を造っている。今回の調査対象とした村は、タートンの町から約15km奥へ入ったパンサー村と、他の一つはメチャンの町から約40km奥地に入ったバンマイデン村である。これらの部落は周囲を山に囲まれてはいるが、やや平坦で静かな場所である。彼らは家を建て、村を造る場合、水のある所を条件とし重視する。即ち、山から水を引くことができたり、近くに川が流



図1 リス族の移動

れている所を選ぶのである。

一般にリス族の村は、小さいもので30～40戸、大きい村で100～120戸くらいが単位となっている。我々の訪れた村はいずれも50戸くらいからなり、300～400人が住んでいた。村は簡単な草ぶきの小屋が点在しているといった感じである。彼らの家は平土間式と高床式の二つのタイプがあるが、私たちの訪れた村はいずれも平土間式の家屋であった。鳥越氏⁶⁾は「水稻農耕民は生活形態から見て、高床式住居で、別に穀物倉を持っており、焼畑農耕民は平土間式住居に高床式の穀物倉を持っている。」と分類しているが、北部タイの少数民族の中には相次ぐ政変などにより、民族移動を繰り返しているうちに山地に逃れて水稻農耕から焼畑農耕へと転換を余儀なくされた種族も少なくないと言われている。また、飯倉氏⁷⁾によると「リス族は元来は典型的な焼畑農民であり、山地民族らしく猿を始祖とした民族起源の神話が彼らの中に見られる。」と言う。今回調査したリス族はいずれの流れを持っている種族なのか、その点は明らか



図2 リス族の土の家と軒下の白

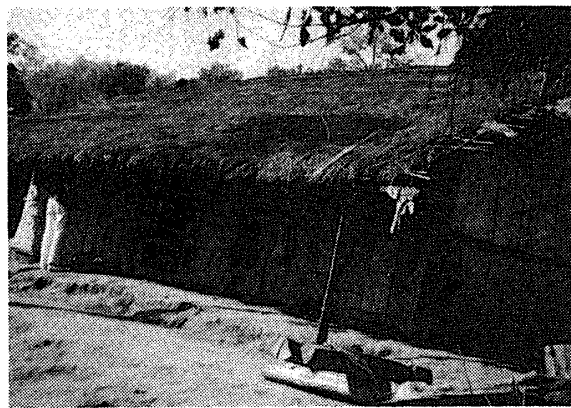


図3 リス族の竹の家

ではない。彼らの家の建築材料は主に竹であるが、柱には竹か木が用いられている。バンマイデンの村のリス族は20年くらい前から住んでいるということであるが、その家の壁には、戦前、日本の農村の一部で見られたような粗壁がつけられており、軒下には白がおかれており、屋根は草ぶきである(図2)。また、パンサー村は16年前から住んでいるということであったが、壁は図3のような立ち上がりの竹であった。家の入口は一つで中央にあり、その突き当たりには小さな棚をつただけの祭壇が設けられ、右手奥の側に寝室があり、右手手前の突き当たりに台所が設けられている。また入口の左側の奥が一段高くなっており、その手前に炉があって、接客などの場所になっている。中には、台所が別棟になっている家も見られた。多くの家は寝室に仕切りはあるが、それは極めて簡単な竹や木の囲いで仕切られ、家族間のプライバシーといったものはあまり認められず、大家族が雑魚寝をするのが一般的のようである。

(2) 食生活

北部タイのリス族は、チベットを出てから百数十年間の移動の歴史があるにもかかわらず、発祥の地である中国の生活習慣がかなり受け継がれている。それは食生活においても、中国の茶を飲み、また納豆、豆腐を作ることのほか、ほとんどの山地民族が手で物を食べるのに対し、この種族は箸を使って食事をする。しかし、一方においてはタイ人の影響も受けており、タイ料理に多く使われているタイ式の香辛料を使った料理も見られる。食事は1日2食で間食はしない。そのためか朝から肉のようなカロリーの高いものに野菜などを添えた食事をするが、狩猟や遠方の畑仕事に出かける時だけは昼食の弁当を持って行く。また、米飯を主食にするが、

タイの平地でとれる細長い米ではなく、日本の米によく似た丸くふくらんだ米を用いている。彼らは米のほか、トウモロコシ、馬鈴薯、豆、にんにく、赤唐辛子なども栽培している。これは平地民との交易品として重要な農産物である。また、彼らはヤオ族、メオ族などと同様、ケシの栽培にも長じており、自家用は勿論、経済生活の貴重な財源ともなっている。彼らはアヘンと共に男女を問わず酒類も好んで飲む。これは自家製で、トウモロコシから作ったアルコール度の高い酒であり、一番酒から七番酒くらいまでの段階がある。一番酒はアルコールの度数が60度近くあり、四番酒くらいが日本で一般に飲まれている日本酒程度の強さである⁹⁾。また食事の行儀作法も大変厳しく、坐る座席も年長者から順に決まっており、女性は男性がすませた後でないと食事をするができない。つまり、家長制度、男尊女卑の風習の厳しい種族である。しかし、バンマイデンの村を訪れた時は丁度食事時であったが、男女同じテーブルで食事をしてきた。彼らの食事はメオ族やカレン族に比べ高蛋白質で変化に富んでおり、山地民族の食事としては豊かな方である。なお、バンマイデン村の入口にはタイ政府の農業試験場があって、農作物の指導がされていた。また、タイ政府は子供たちを教育するため学校を建て、彼らの定住化への関心を高めるよう指導をするなど、努力が払われていることが伺える。

(3) 習俗¹⁰⁾

- 1) 信仰……リス族の信仰は他の山地民族と同様に精霊信仰であり、彼らの生活の中で信仰は大きなウェイトを占めている。自分たちの行くところにはすべて精霊が宿り、守護してくれていると信じている。その精霊の司祭者は宗教指導者のシャーマン(祈禱師)である。彼は集団の儀式における指導者であり、精神面での絶対的権威者である。また、病気の時、あるいは冠婚葬祭などのすべての儀式をとりしきり、宗教行事に助言指導を行う義務を持っている。
- 2) 新年の儀式……リス族が受継いでいる中国の習慣の一つに新年の儀式がある。儀式は6日間続けられるが、村人たちは新年の神に豚や鶏をいけにえとしてささげたり、爆竹を鳴らしたり、また若者は最高に着飾り、その期間中は夜遅くまで歌い踊るなどで新年を祝う。彼らの単調な日常生活の中で新年は厳粛な行事であると共に、村人の楽しい交流の場でもある。
- 3) 婚礼……一般に山地民族は結婚に関して自由な考えを持っているが、リス族には珍しく厳しいおきてがある。また、彼らは熱心な精霊信仰者であることはすでに述べたが、自分の回りにはすべて精霊が存在していると信じているため、結婚式の日取りなどを決めるにも極めて慎重であるという。
- 4) 葬儀……彼らは葬儀も厳粛な儀礼の一つであり、これもシャーマンが司るが、棺の前には線香やろうそく、酒、お茶や料理が供えられる。

2. 衣 裳

リス族の衣裳は男女共に他の山地民族に比較して色彩面、構成面及び手芸的な手法は他の種族に見られない特有のものがある。彼らの衣生活は作業着、外出着、季節による区別などがなく、儀式の時にも基本的に変わらないが、銀細工をした首飾などの装飾を増す。それは彼女たちの財産を皆に披露する機会である(図4)。次に彼らの衣裳について男女別に述べることにする。

(1) 男性の衣裳

- 1) 上衣……男性の上衣は黒のサテン風の艶のある生地やベルベット風の毛足のある生地を用いている。形態は図5のような衿なしで、衿ぐりから右身頃の脇に向って斜めの打合で

ある。これは中国の旗袍^{チイバオ}の腰丈までの形態に近似したものである。その打合には、配色のよい細い布を丁寧に18本並べ重ねて接ぎ合わせた3cmの幅の縁どりがされている。なお、衿ぐり、袖口は共布のパイピング仕立てである。更に打合から胸、背面、肩の周りには銀のびょうをちりばめて止めてあり、男性の衣裳としては他の種族に比べてかなり華やかな装飾が施されている。それは白木綿の総裏仕立てになっているが、これを1年中着用している。

2) 下衣……下衣は図5のように裾口から幅広の大きな裆^{マチ}が付けられたゆったりとしたもので、トルコのシャルワールに似た形態である。なお丈は膝下程度であり、着装した時には裆の部分^{マチ}が両足の間にたたみ込まれ、七分丈のズボンのように見える。日本の祭り衣裳の下衣の中にも大きな裆が見られるが、裆を裾口から付けたものはあまり見られず、リス族特有の下衣である。

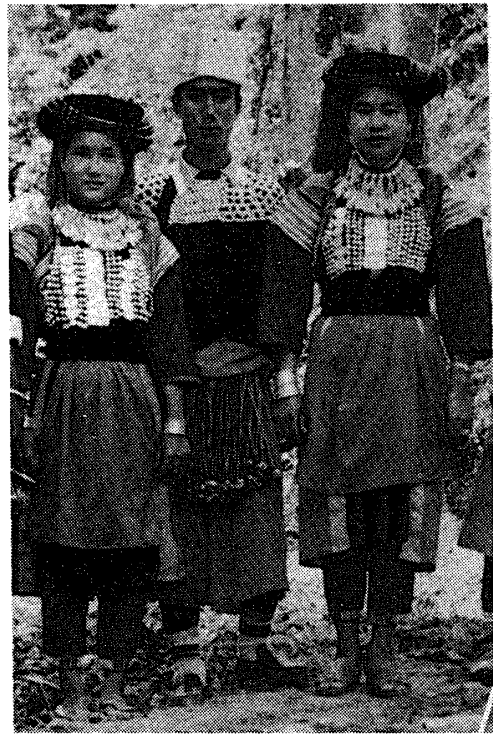


図4 リス族の男女の正装
(現地絵ハガキより)

このような構成は、機能面で問題となる場所であるが、彼らは長年の習慣と裆幅が広くてもズボン丈が短いためか作業時の動作に支障を感じていないようである。その下衣の上には前面に図4のように腰から大きな房飾りを2束ぶら下げている。それは1束が110本もあり、細い紐を束ねたもので、その1本1本は布をよりぐけのようにして作られていて、その先には小さなボンボンが付けられている。その房は約50cm丈でオレンジ、グリーン、ブルー、白、黄、赤など多色を混ぜ合わせた色鮮やかなものである。下衣の水色やグリーン^{マチ}のズボンに映えて華やかなふんい気を見せているが、この房飾りは魔除けのためのものであると言われる。

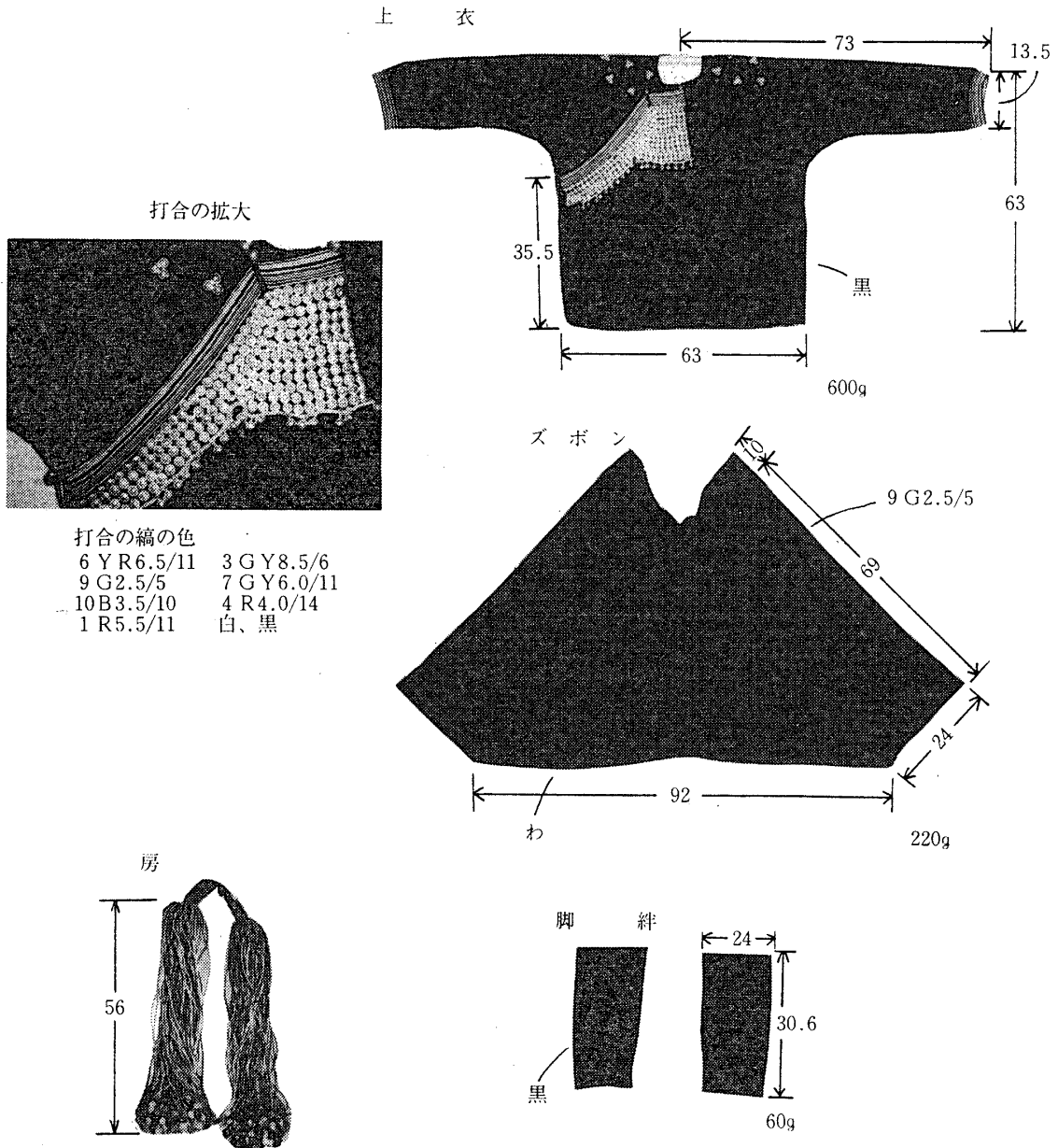
3) かぶりもの……頭には一般的には白のターバンを巻くが、最近では日常はこれを用いない人も多くなっている。

男性の場合近年では平地の町からの影響を受け、普通のシャツにリス族のズボン姿の人を多く見かけるようになった。このことは男性は女性に比べて時代の流れや環境の変化に対する順応性が高いものと考えられる。

(2) 女性の衣裳

リス族はチベットを出てからかなり長い移動の歴史があるにもかかわらず、中国の生活習慣を継承している面があることは先にも触れたが、それは衣生活の上にも反映している。

1) 上衣……女性の上衣は中国の旗袍^{チイバオ}と同型式である。胡服は本来は遊牧騎馬民族の衣服であったと言われているが、その胡服の上衣(褶)に似た型式である。このことから彼らの先祖は遊牧の民であったことが推察できる。図6に示した様に男子の上衣と同じアンバランスの打合で、脇には腰から裾にかけてスリットの入ったふくらはぎ丈のドレスであるが、後丈の方が16cmほど長くなっている。その上衣は衿なしで、前から後にかけて13cmの黒の円型のヨークが付けられ、そのヨークの下に胸元から背中、また袖にかけて約13cm幅に細い縞が細密なアップリケの方法によって付けられている。それは虹を思わせるような



	厚さ (mm)	密度 (本/cm)	
		タテ	ヨコ
上衣	給で計測不可	32	17
ズボン	0.36	31	21

図5 男性の衣裳 (単位: cm)

各色を組み合わせた色鮮かなものである。カノミ氏⁵⁾によれば、この黒のヨーク、脚絆の赤の色使いには約束ごとがあり、必ずこの色を使うことになっているという。腰には上衣の上から黒の帯を締め、男性と同様のポンポンのついた房を後に下げている。

2) 下衣……下衣は男性のズボンと同形であるが、そのズボンはゆったりしているので、静止している場合にはズボンなのかスカートなのかがはっきりしないような形態である。その黒色のズボンに赤色の脚絆をつけている。

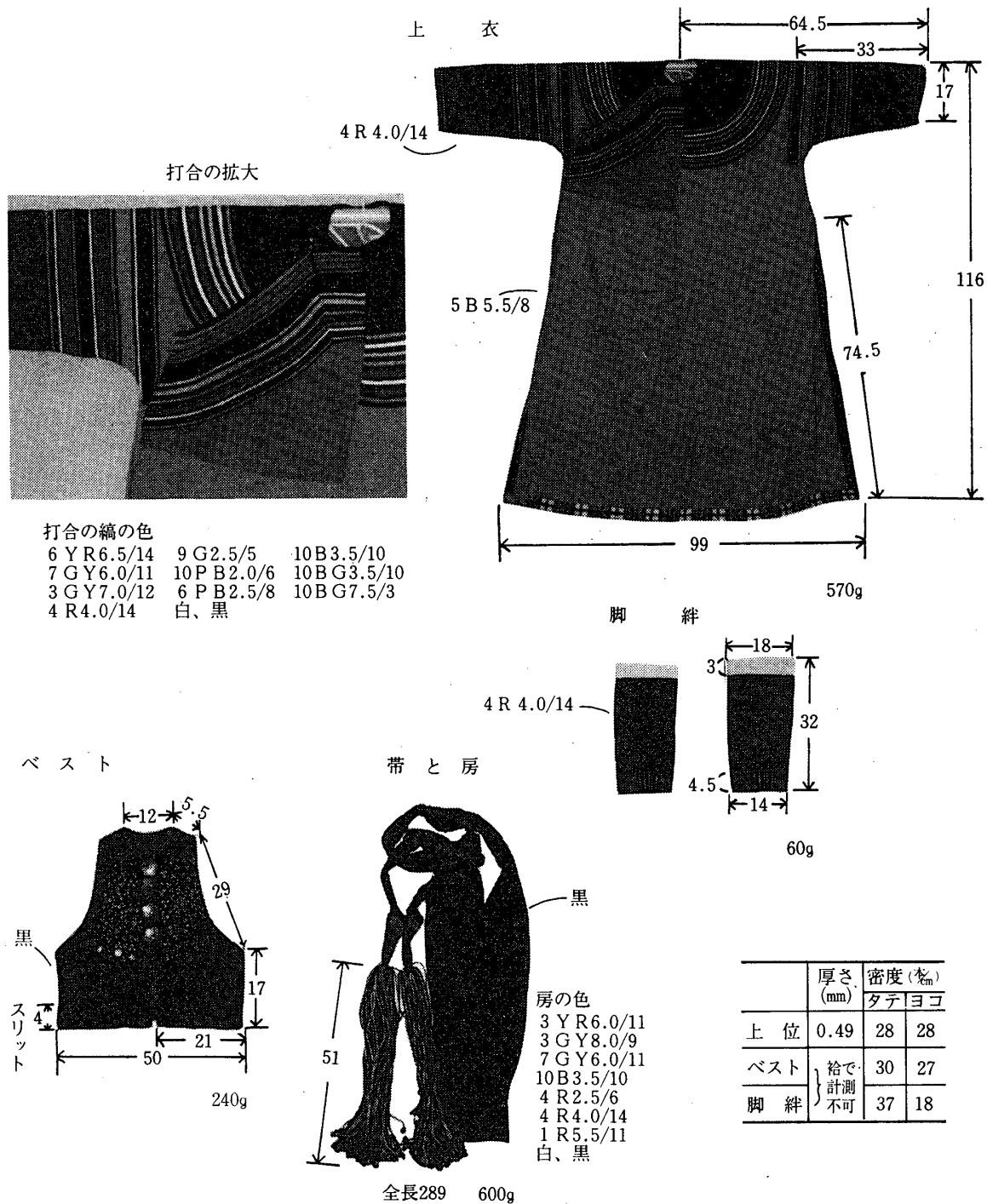


図6 女性の衣裳 (単位: cm)

3) かぶりもの……頭は大きなターバンを巻いたような帽子で、後に飾りを垂らしたものをかぶるのが普通である。山地民族の精神のよりどころは精霊信仰が中心であり、特に頭は精霊の宿っているところとして、かぶり物は絶対にはずさない習慣がある。このことはヤオ族の場合(名古屋女子大学紀要第32号)にも報告したが、最近では祭りや正月などの儀礼の時にのみかぶり、日常は帽子はかぶらなくなり、図7のように髪を後で小さく丸めて俗に言うひつつめ髪のようにまとめている。このようにリス族はヤオ族などに比べるとか

なり先祖からの習慣がくずれてきているようである。

次に衣裳の色目については、メオ族、ヤオ族、アカ族など、他の種族が藍染めや、町から購入した既製の黒色木綿の生地を用いるのに対して、リス族は上衣にグリーンやブルーなどを用い、色彩的に華やかである。これも他の種族と異った特色の一つといえよう。



図7 リス族の日常着

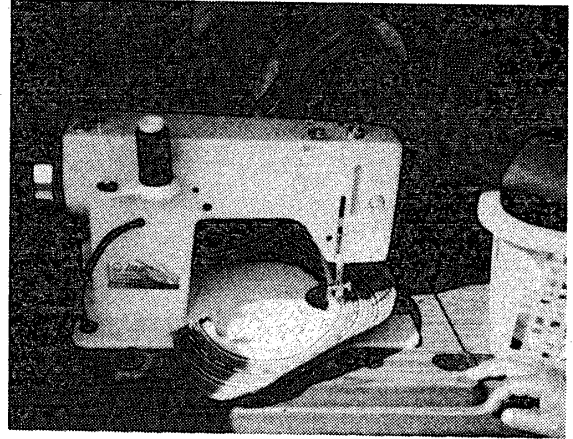


図8 衣裳作り

なお、祭りやその他の儀式にはベストを着用するが、それには高価な銀のびょうが一面に縫い付けられている。この銀製の装身具を用いることは一般に中国文化からの導入で、比較的新しい様式のようなだと言われている⁹⁾。先にも触れたが、リス族にはヨークは黒、袖と脚絆の地色には赤色という約束ごとがあると言われるが、このようなカラフルな色彩は子供から老婆まで同じであり、老婆がこの鮮やかな色彩の衣裳を着用していても少しも不自然さを感じさせない。これは彼女たちの生活の中から生まれた色彩であり、意匠でそれがうまくとけ込んでいるからということであろう。また、それが生活の中から生まれた伝統的文化であり民族服である。村では若い男女は野外へ出て働くことが多いが、残っている女性は集合所のような所に集ったり、あるいは家の軒先などで衣裳作りを楽しそうに話をしながらミシンや手仕事に余念がないが、一見自由に見えるヨークのトリミングの色の組み合わせに女性は大変凝り、お互いが競い合っているのである。ミシンについては、私たちの訪れたパンサー村では10年ほど前に町へ行き、その扱い方を習ったうえで購入したと話していたが、リス族の手芸的なものの特徴は細い布を重ね合わせて、虹のような縞をアップリケによって作り出す手法で、しつけやピンも打たず手先のみ作業によって作られている(図8)。その扱い方の熟練さは私たちの到底及ぶものではない。この技法を用いる種族はリス族の他にラフ族がいるが、彼らは黒地の身頃に赤・白・黒・あるいは白と黄色を組み合わせる程度である。

(3) 素材

タイ北部の山地民族の中でラフ族、ラワ族、カレン族は衣裳に綿を用いることが多いが、リス族、メオ族は従来麻を用いてきた。それはメオ族などは綿より麻の方が、プリーツ効果がよく、さらっと快いからという理由で麻を用いてきたと言っている。リス族もかつては衣服はすべて麻であったが、近年では町から購入することが多くなり、中には綿65%、ポリエステル35%という混紡で衣裳が仕立てられているものもある。一般に山地民族の女性は機織は彼女たちの生活の中では極めて重要な仕事であった。しかし、今日では既製衣料がたやすく手に入るようになり、機織をする者はだんだん少なくなってしまったという。特にラフ族、リス族、ヤ

オ族の間では布は他から購入することが、一般的な傾向となってきたようである。

結 語

リス族の生活と衣裳について1980年～1985年の間に行った調査結果について考察を行ったが、リス族は山地民族の中でもメオ族、ヤオ族、アカ族と同様、海拔1000m から1500 mの高地で焼畑耕作を主体に生活を営んでいる種族である。しかし、アカ族やメオ族に比べ、独自の生活文化を持っている。それは彼らの祖先の発祥の地である中国文化の一部が残存し、日常語や宗教用語に中国語が取り入れられていること、食生活においても多くの他種族が手づかみで物を食べるのに対し、箸を用いて食事をする事など、その献立もアカ族やヤオ族の食事が米と野菜が主体で質素であるのに比べて、日常でもかなり栄養価の高い豚や鶏など動物性蛋白を取り入れている。衣生活においては種族特有の色・形・装飾的テクニックなど、彼らの個性的な点を維持しながらも、その材料となる布や染めは平地の町から入手する。あるいはミシンを使った製作など、これらはいずれも近代化の波に順応してゆきつつあるものと思われる。また、彼らの生活を支えている焼畑耕作にしても、タイ政府の森林保護政策などから、それが難しくなり、定住化の方向へと進みつつある。種族によっては定住せざるを得なくなり、他の種族と隣接して住むこともあって、お互いの文化交流も始まり、従来のような種族間の明確な区別が薄れている村も見られるようになった。これらの現実から種族固有の文化が失われていく日がそう遠くはないのではないかと思われる。また、彼らの子供たちもタイの学校へ通い、制服を着ることなどが義務づけられ、その結果村に帰っても伝統の風俗、習慣が次第に忘れられ、伝統的な衣裳から徐々に離れて行くのではなかろうか。

山地民族には本来、種族自身に文字はなく、長年の習俗が記録されているわけではない。それは先祖から次々に伝承し、体で覚え体験によって身につけて来ているにすぎないのである。したがって、その本質がわからずに、ただ伝統を守り続けている人々が多くなり、衣裳についても、その重要な色や柄の意味が意識から薄れ、また、装飾などについても世界の流行などに流されて次第に変化してしまうのではなかろうか。私たちは北部タイの山地民族について調査した結果から、その変化はかなり著しく、今のうちに何らかの対策を講じない限り、この貴重な文化遺産もいつの間にか消え去るのではないかと危くするものである。

文 献

- 1) 服装文化協会：服装大百科事典，344～345，文化出版局（1969）
- 2) 村松一弥：中国の少数民族，177～179，毎日新聞社（1973）
- 3) 白鳥芳郎編：東南アジアの山地民族誌，講談社（1978）
- 4) 竹村卓二：月刊みんぱく リス族とアカ族の女性の衣服，6月号（1978）
- 5) カノミタカコ：タイの国より愛をこめて，染織と生活社（1982）
- 6) 鳥越憲三郎：原弥生人の渡来，角川書店（1982）
- 7) 飯倉照平編：雲南の民族文化，13～14，研文出版（1983）
- 8) 鳥越憲三郎：雲南からの道，講談社（1983）
- 9) 黄邦傑：中国少数民族衣飾，54～55，三聯書店香港分店（1985）
- 10) 柴村恵子，織田恵子：名古屋女子大学紀要，27（第1報）（1981）
- 11) Alan R. Randall：People of The Hills，155～177（1980）
- 12) J. S. Uberoi：From The Hands of The Hills，（1981）